

みなさんおはようございます。いよいよ秋も深まりを増し、寒い日が続いております。今朝は寒いでしょうか？この原稿を書いている今は二週間程前ですので、きっと寒いのだろうと推測して書いております。

さて、この放送をお聞きのみなさんは、きっと今、目が覚めていることでしょう。眠っていても聞くことは出来ないからです。もしかしたら先ほどまで一晩中、働いておられた方もいるかもしれません。お仕事おつかれさまでした。眠っていた方、起きていた方、いずれにしても、夜が明け、本日が始まりました。

このラジオ法話はわたくしたち本願寺派の僧侶が持ち回りで原稿を作成し放送しています。当然、締切があります。原稿の作成依頼は、春ごろでした。ずいぶん余裕があったのですが、気が付けばもう、放送の二週間前の今頃になって慌てている次第です。

「それなら充分、時間があったじゃないか」と、思われることでしょう。全くその通りです。つつい面倒と思い、「まだまだ時間はある」と原稿作成から逃げるわたしが居りました。

しかし、あっという間に時は過ぎて行きました。なんと春から秋にまでなってしまうました。

ところで、寒い朝、目が覚めてもなかなか床から抜け出せない経験はみなさんにはあるでしょうか？「あと五分、いやあと三分」と、なかなか床から抜け出せない私がおります。やっと抜け出して洗面を済ませ、身支度し、さあ、出かけようと思うと、そんな時に限って、車のかぎが見当たらない、携帯電話が行方不明、挙句の果てに大事な手帳が何処へやらという始末です。気が付けば約束の時間ぎりぎりまで紛失物の大捜索で大慌てとなってしまいます。

よく似た話ですが、ある調査によると、多くの恋人たちにとって、デートなどで互いに「会う」という行為はどんなに長い時間を過ごしたとしても「じゃあ又ね。バイバイ」をするのと結局は同じこと。つまり出会う事と、バイバイする事は表裏一体と受け止められているそうです。きっと楽しい時間はあっという間に過ぎて行くのでしょうか。これをなくしてしまえるから恋人たちにとって同棲が魅力的なんだそうです。それでは、いっそうのこと結婚してしまったらと思うのですが、どうでしょうか。

しかし会ったら別れるのが必然です。どんなに愛しい相手でも喧嘩するのがわたしにとっての日常ですが、たとえ離婚せずにどんなに長く仲良く結婚生活という時を過ごしても死別からは誰一人、逃れることは出来ません。

原稿作成という自分にとって面倒なことを先延ばしにして、逃げよう思っても、やってくるのが締切。

寒い朝、「あと少しだけ布団の中にいたい」と願っても起きてお仕事に行かなければならないという現実。

恋人たちは少しでも長く一緒にいたいと願い、仲よし夫婦は互いに健康で長生きをと願うのに必ず訪れる別れ。

このように、「時間」というものはわたしたちの都合にはまったく関係なく過ぎていきます。つまり、それぞれの人や、おかれた状況によって時間を長く感じたり短く感じたりすることはあっても、時間の方は一瞬たりとも留まることのないのです。それは一生という期間はその人その人によって確かに違いがあっても、人生という時間には限りがあるということです。究極的には必ず死が訪れるというわけです。そうであるにもかかわらず、それを先延ばしにしたいと願うわたしがまた、ここにいます。

いつかは必ず死ぬわたし。それは今日かもしれません。

限りあるいのちに気づくとき、慌てることのないように、死んで終わってしまうようないのちには絶対にしないよ、必ず仏に成らせますよ、と阿弥陀さまが誓われておられます。その誓いはすでに、仕上がり、願い続けるはた

らきとなったださっております。そのおはたらきを「南無阿弥陀仏」と申します。

南無阿弥陀仏はいつでも、どこでも、だれにでも、分け隔てなく、はたらき続けてくださる仏さまです。その仏さまは、わたしの口から声となり出てくださるのです。時間がないとか、寒いとか、別れたくないとか文句ばかりを言う、わたしの同じこの口から出てくださるのです。南無阿弥陀仏と声にでてくる仏さま。その声をお念仏と申します。

さて、今朝は寒いでしょうか。床から出るのが億劫でしょうか。今日が来ました。それは、当たり前ではなかったのです。今日という日は、二度とはやって来ないのです。出会いや別れ、うれしいことや悲しいこと、そのひとつひとつは本当に大切な、二度とはやってこない瞬間です。けれども、そのことにだけとらわれて、そのことにだけ価値を見出そうとする私達。けれども、阿弥陀さまという仏さまは違います。どのような朝を迎えようともその瞬間の、そのままの私に価値を見ていてくださるのです。

明日の朝、果たして目覚めるかどうか、全くわからぬわたくしが、気づけば寒い寒いと文句を言いながら、また今日の朝を迎えました。しかしそれは阿弥陀さまがご一緒してくださる得難い大切な一日のはじまりなのだと思われた今日の朝でありました。